

# 震災ボランティア

石川和臣

## 序論

2011年の最大の出来事に東日本大震災を挙げることが出来る。3月11日14時46分、三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の大地震が起きた。筆者の住むさいたま市は震度5強を記録し、今までに体感したことのない強烈な揺れに恐怖を覚えた。東日本大震災の約1か月前に地震がニュージーランドを襲い、連日流れる現地の報道に心を痛めたばかりであった。その最中で起きた東日本大震災。テレビでは、車や家屋をいとも簡単に飲み込む津波、火に包まれた石油コンビナートの映像が映し出され、信じがたい光景に啞然となった。

今までの何気なく暮らしていた日々が、3月11日のあの日から一変した。緊急地震速報が鳴るたびにあの恐怖に怯え、睡眠も上手くとれないようになっていた。世間が、日本が、暗く落ち込んでいた。そんな中、まだ震災の落ち着きが見えない頃、被災地や被災者を助けるべく、全国から多くの方々がボランティアとして現地を訪れた。利用可能な交通手段を使い、なかには移動費用を抑えるためにヒッチハイクを使い、現地に向かった人もいた。自分の生活を削ってまでも、被災地を助けたいという姿勢に共鳴を受けた。そこで、本論では、筆者が今回行ったボランティア経験を踏まえて、震災ボランティアについて述べることにする。

## 本論

### 1. ボランティアとは

#### (1) ボランティアの定義

川口清史らは「ボランティアとは、ボランタリズムの価値を体現して、ボランティア活動をする人たちである。」<sup>1</sup>と定義づけている。また、ボランタリズムの意味は、人間の心の機能の中の「知・情・意」のなかで「意」を最も優先させる思想のことである。つまり、

---

<sup>1</sup> 川口清史・田尾雅夫・新川達郎編 『よくわかる NPO・ボランティア』 ミネルヴァ書房、2005年、p.6.

自分の意思で行うものとされ、強制的ではなく自発的に、それがボランティアである。

ボランティアは、自らの利益を目的に行うものではない。報酬を得ないこと、無料であることが原則である。

## (2) 無償ボランティアから有償ボランティアへ

上述のようにボランティアは無償が原則である。しかし、最近では、この定義は一昔前のものとされており、有償のボランティアが増加している。有償ボランティアとはどのようなものかという、2種類を目にする。行動する際の交通費や食事費が支給されるタイプ。一般の労働賃金よりかなり低い報酬が払われる。しかし、それらには、補助的な意味合いが強い。ボランティアは無償が原則であるが、絶対ではない。ボランティアという言葉は、もともと「volunteer」という英単語であり、「志願者・義勇兵・自発的」を意味し、無償については触れられていないのである。

ボランティア活動が絶対化と言うと、そこには限界もある。そこには、衛生面、体力面等、見える部分から心の中のような目に見えない部分まであり、筆者たちのような専門技術を持たない者では手に負えないものもある。その不足を少しでも補完するための有償であれば、有償ボランティアの存在は間違っていないのではないと考える。実際、現在では有償ボランティアの考えは徐々に広まりつつある。

## 2. 震災におけるボランティア

今回の震災後のボランティアと言っても、瓦礫の撤去、泥の除去、炊き出し、さまざまな種類の仕事がある。これらは被災地で行うボランティアである。しかし、ボランティアと言って一くりにすることはできない。なぜかという、被災地で行うだけがボランティアではなく、身近な所からも始めることが出来るボランティアもあるからである。

### (1) 節電

今回の震災では、電気の供給量が足りなくなったことで、3月の終わりに計画停電が行われた。これも、ひとつのボランティアと言える。停電の時間内は寒さを凌ぐための電気ストーブ、情報源のテレビが使うことが出来ず、それは我々の生活に支障を与えた。また、外に出れば、その間信号や夜の街路灯の灯りが点くこともなく、まさに暗黒の世

界であった。人を助けるべく、ひとつの手段として採用された計画停電が、混乱を招いたことは事実であり、計画停電がそう長く続くことはなかった。

しかし、その後の生活に「節電」という言葉が浸透した。今までの節電は、電気代が料からないように、という自分のために行っていた節電であった。しかし、震災後の節電は、困っている人の為にといい想いから行っていたのではないだろうか。震災を契機に、「自分のため」から「人のため」へと節電の在り方が変容されていった。

未だなお、あらゆる場面で「節電」に出くわすことがある。スーパーマーケットに入ると、以前よりも明るさが抑えられており、冷房の温度も高くなっている。通学で利用する駅では、エスカレーターやエレベーターの利用が制限されている。電化製品でも、以前に増して節電を意識した冷蔵庫等が販売されている。個人のものから企業のものまで、皆が改めて「節電」を意識するようになった。計画停電を実施したことが、節電の継続に繋がっている。このように、継続をすることで、はじめてボランティアと言うことが出来るのである。

## (2) 芸能人

被災地には、多くの芸能人も足を運んでいる。なかには、自らが大型トラックを運転して訪れた方もいる。彼らはメディアに出ることで、人々に勇気や感動を届ける仕事を職業としている。炊き出し、チャリティーオークション、コンサートなどを開催した。これらは、彼らだからこそ出来る支援方法であり、自分たちの立場を理解しているからこそできる活動である。被災者の笑顔いっぱい、喜ぶ顔は、復興への希望が消えていない証拠である。震災で自らの家族や親族を亡くした芸能人もおり、辛さを理解しているからこそ出来る表現の仕方と言える。一般人が出来る支援方法で芸能人が被災者を支援したとしてもあまり意味がないのではないか。

「人の為と書いて読む偽り」という歌詞<sup>2</sup>があるが、時には、人の為に起こした行動が売名と捉えられるかも知れない。しかし、影響力のある芸能人にとっての一番の支援方法は、被災者に元気や笑いを届けることであると筆者は考える。仮にそれが売名であっても良いのではないか。被災者に幸せ感じてもらうことが一番の目的であるのだから。

## 3. 救援物資ボランティアへの参加

3月25日、大宮にある三橋総合公園で行われた救援物資のボランティアに筆者は参加

<sup>2</sup> S.L.A.C.K. TAMU PUNPEE 仙人掌 「But This Is Way」 2011年

した。18日から24日にかけて公園に集まった物資をトラックに積む仕事である。当日、参加した人は計170人であった(図表1)。募集の定員を上回る多くの人が集まった。筆者と同じ20代の方もいれば、小学生や中学生、主婦の方も見受けられた。被災地では、水道、電気、ガスなどのライフラインを使用できないため、食糧はあったとしても調理をすることはとても困難である。そのため、ペットボトル飲料水や乾パン、カップ麺、レトルト食品等の調理せずに口にすることが出来るものや調理が容易なもの。その他、粉ミルク、離乳食、紙おむつ、女性衛生用品、トイレットペーパー、ティッシュ、ウェットティッシュ、タオル、マスク、ブルーシート、毛布が心温かい人々の協力で集めることが出来た(図表2)。物資が入っている段ボールの表面には、絵や被災者へのメッセージが記されていた。「負けるな東北」、「がんばれ日本」といった応援するもの、「一緒に頑張ろう」、「心はひとつ」といった、震災による困難や苦しみを共に乗り越えようというもの等、私たちは、人々の温かい心のこもった物資をひたすらトラックへと運んだ。全くの見ず知らずの人たちが、どうすれば効率良く運べるか、時には意見を出し合った。また、通りすがりの年配の男性が、ボランティアが行われていることを知ると、自ら志願して「私にもやらせて下さい。力にならせて下さい。」と言って参加する出来事にも遭遇した。心温まる場面に自らも参加していたことが何より嬉しく感じた。

ボランティアに参加して、「人が生きる理由は人 それが繋がって地球は一つ」という歌詞<sup>3</sup>が真っ先に頭に浮かんだ。被災者の苦しみは私たちの苦しみであり、被災者の喜びは私たちの喜びである。東日本大震災は日本全体に罅を入れ、悲しみでいっぱいになる出来事であったが、その中でも人は助けあい、前に進もうとしている。こうして、皆の気持ちが一つになり前を向いている間は、日本は絶対に亡くならない。必ず、日本は復興できると筆者は信じている。

---

<sup>3</sup> 神門 『元気?』 作詞・神門 作曲 観音クリエイション 半袖バイブスレコード、2009年

**図表1 救援物資の受付や整理などにご参加頂いたボランティアの方の人数**

日付	受付人数				備考
	市内	県内	県外	合計	
3月18(金)	51人	4人	1人	56人	
3月19(土)	60人	17人	1人	78人	
3月20(日)	56人	22人	6人	84人	
3月21(月)	68人	18人	7人	93人	
3月22(火)	85人	22人	2人	109人	
3月23(水)	70人	31人	4人	105人	
3月24(木)	95人	27人	11人	133人	
3月25(金)	134人	28人	8人	170人	搬出作業として
合計	619人	169人	40人	828	

資料 さいたま市 <http://www.city.saitama.jp/www/contents/1301116221351/index.html>

**図表2 受付窓口にお持ち頂いた救援物資の内訳**

(1)保存食(カップ麺、インスタント麺、乾パン、レトルト食品)	9,073 個
(2)飲料水(ペットボトル、500ミリリットル、2リットル)	6,442 本
(3)粉ミルク、離乳食	2,773 個
(4)紙おむつ(子供用、大人用)	117,338 枚
(5)女性衛生用品	3,038 袋
(6)トイレットペーパー、ティッシュ、ウェットティッシュ	34,448 個
(7)タオル	46,597 枚
(8)マスク	268,903 枚
(9)ブルーシート	534 枚
(10)毛布	1,189 枚

資料 さいたま市 <http://www.city.saitama.jp/www/contents/1301116221351/index.html>

#### 4. 震災ボランティアの問題点

##### (1) 時間

被災地では、物資がすぐに届いた地域と届くまでに時間がかかった地域がある。また、被害の大きかった東北をはじめ関東でも、店から商品が消え、深刻な物不足に陥った。

しかし、そのような中で、ファッション業界の「しまむら」は、いち早く被災地に防寒具を届けることに成功している。ファッションセンター「しまむら」を中心に約1600ある全国の店のうち402店が震災による被害を受けた。しかし、被害を受けた店のひとつ石巻店では、22日には営業を再開していた。まず、緊急車両としての通行許可を得ることに成功していたこと。さらに、しまむらと契約している運送会社が燃料やトラックを確保してくれたこと。この2点が被災地に防寒具を届けることに成功した理由である。特に、後者はしまむらと運送会社との相互依存関係が強いことを証明するものであり、協力しあえる体制を築いていたからこそ、このような予期せぬ災害時でも力を発揮することに成功した。さらに、「しまむら」では商品を運ぶためのルートを頻繁に見直していたことで、震災時の対応を比較的スムーズに行うことが出来たといえよう<sup>4</sup>。

今回の震災では、救援物資を送る際に時間がかかってしまった。その理由に道路が壊れてしまったことも挙げられるが、物資を集める際に手間がかかってしまったことが何よりの問題であると考えられる。被災地に早く届けなくてはいけないはずの物資がかえって問題を引き起こしてしまった。特に、衣類は新品でないと物資として認められず、支援したい方の気持ちとは裏腹な話であった。物不足のはずが、送る物資を制限された。これは矛盾している。確かに、被災者の立場ならば、中古品よりも新品を欲しい。しかし、今回は未曾有の一大事である。3月の寒さを耐えるために衣類はすぐに必要なものであり、生死を分け合う環境で衣類は一種のライフラインである。「非常時だから、最初からすばらしく効率的な物流など考える必要はない。まず物を現地へ入れる。それができれば後から効率化のアイデアはいくらでも出てくる<sup>5</sup>」と「しまむら」の社長は語っている。

前述したように今回の震災では被災地への救援物資配送、分配には完璧を追求するあまり無駄な時間を費やしてしまったところもある。「完璧に、皆に公平に」も重要であるが、

<sup>4</sup> 日経MJ 『しまむら、震災物流で底力』 5月18日付を参照した。

<sup>5</sup> 日経MJ 『しまむら、震災物流で底力』 5月18日付

災害時ではスピーディーな対応が求められる。避難所での初期の対応では、一食がおにぎり一個、一日2食などと言うことも報道されていた。このようなことが今後あることは望ましいことではないが、災害は絶対に起きないとは言い切れない。「他山の石」として心に留めておきたい。

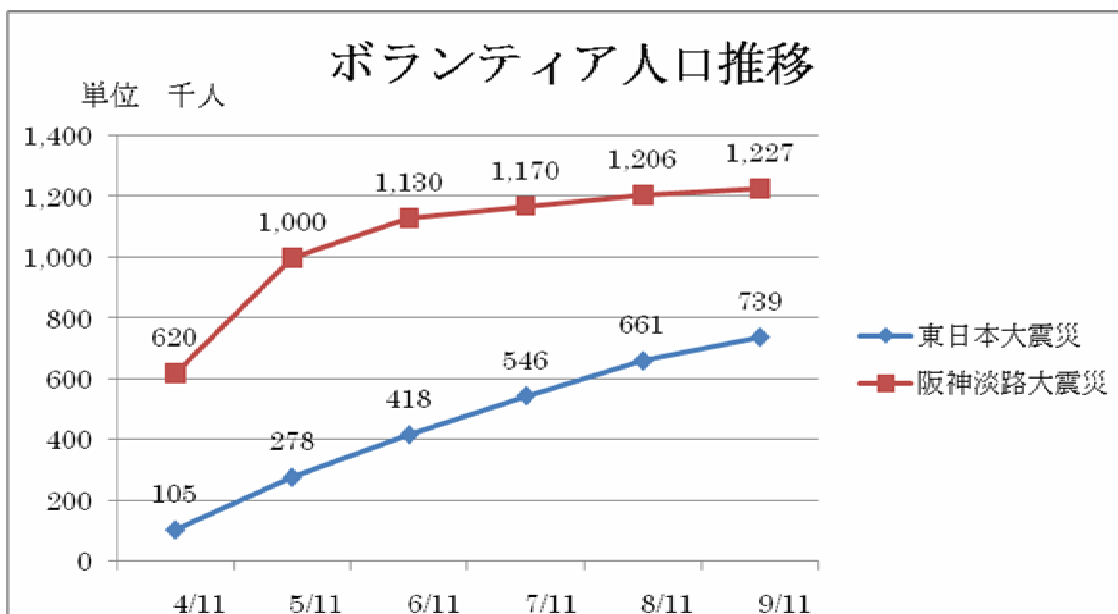
## (2) 継続性

震災から数カ月間、直接被害を受けていない人々の生活に自粛ムードが流れた。普段ならば、会社帰りに立ち寄っていた居酒屋からサラリーマンが消え、行楽地でも客は減った。「被災者を想うと、今までの暮らしは贅沢であり失礼であった。」この考えは、日本中に広がった。しかし、半年が経過した今ではどうだろうか。震災以前の変わらないような生活を送っているのではないか。人々は、被災地や被災者に起きている事態を忘れてしまったのだろうか。

一方、テレビや新聞でのニュースを見る限り、ボランティアの人数は多いと感じる。しかし、実際には1995年に起きた阪神淡路大震災と比較すると、東日本大震災のボランティアはとても少ないことが分かる(図表3)。

筆者はボランティアを増加させる努力よりも、減少させない努力が必要であると考え。そのためには、継続性が重要である。ボランティアに1日参加して、被災者を救おうというのは甘い考えである。被災者は、私たちの考える、何倍、何十倍もの辛さや悲しみを味わっているのである。たかが1日の参加で、被災者の辛さや悲しみを無くすことは出来ない。ボランティア活動をする人は、始めは1週間でも良い。その後1ヶ月、半年、1年というように長期間、被災者を救う活動を続けてもらいたい。そして、メディアを通して被災地での活動記録を伝えて欲しい。それがボランティアを増加させることに繋がると筆者は考える。活動の継続は意識の継続でもある。被災者を想う気持ちを絶対に忘れてはいけない。

図表3 東日本大震災と阪神淡路大震災のボランティア人口の比較



資料 阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター

<http://www.dri.ne.jp/shiryo/sinsai/kiroku/index.htm>

阪神淡路大震災資料を参照し、両曲線比較図を石川が作成。

### (3) 心のケア

被災者の中には、まだ小さな子どももいれば、お年寄りの方もおり、体力面が不安視されている。それと同じく、災害時では精神面、つまり、心のケアが重要である。災害は、人々の生命や財産に多くの被害をもたらすが、それと同時に心に傷跡を残してしまう。

「仮設住宅への引っ越しが進み、避難所生活のときのような周囲の人たちとの関わりが少なくなると、被災者が孤立していく可能性がある。肉親を亡くし、財産も失った被災者はどうしても将来を悲観してしまう。そうした被災者の精神的なケアと経済的な支援が必要になってくる<sup>6</sup>。実際に現地でボランティアを経験した方の言葉である。

災害時では、長期的に心のケアをしなければいけない。被災者は慣れない避難生活でストレスが溜まり、PTSD（心的外傷）を起こす可能性が高い。また、お年寄りの中には、命が助かった幸運が逆に罪悪感にさいなまれるサイバースギルトを発症させる人もいる。被災者の心の中を覗くことは出来ないが、被災者の感情が必ず表情や言葉として表れる。

<sup>6</sup> msn.産経ニュース

<http://sankei.jp.msn.com/region/news/110811/fkk11081102230001-n1.htm>



被災者が発信する小さな SOS を見過ごさないように細心の注意を払わなければいけない。

そのためには、心理カウンセラーや臨床心理士の力が必要である。なぜならば、ボランティアでは心理的なサポートをする知識に乏しいからである。「心の専門家」に来てもらい被災者の心の問題をケアしてもらおう。そこにボランティアの行動力が加わることで専門性に普遍性が加味され、異なる形の支援ができるのではないだろうか。ボランティアだけで対応しようとは考えずに、専門の力を借りることも大切である。

#### (4) リーダーの不在

避難所では、ボランティアを取りまとめるボランティアコーディネーターが不足している。ボランティアコーディネーターとは、『一人ひとりが社会を構成する重要な一員であることを自覚し、主体的・自発的に社会のさまざまな課題やテーマに取り組む』というボラを理解してその意義を認め、その活動のプロセスで多様な人や組織が相互に対等な関係でつながり、新たな力を生み出せるように調整することにより、一人ひとりが市民社会づくりに参加することを可能にするというボランティアコーディネーションの役割を、仕事に担っている人材(スタッフ)のことをいう<sup>7)</sup>。これは、言い換えればリーダーを意味する。リーダーというのは、的確な指示や判断を行い、メンバーをまとめ、舵を取る。このような人物が、避難所では足りていない。他方、ボランティアは、単独ではなくグループで活動することが多い。そこでも、リーダーの存在は必要である。ボランティアに参加する人の多くはボランティア未経験者や初心者である。人により、得手、不得手があり、コミュニケーション能力や環境適応能力、行動力等、それぞれ差がある。いくら、グループで力を合わせてもボランティア経験に乏しい人だけでは思うような活動は出来ない。そこで、リーダーの力が必要になる。リーダーは、リーダーシップを執り、力や能力を引き出す役割を果たす。被災者を安心させるためには、ボランティアにもその心をケアするための安心を届ける必要がある。ボランティアが不安で焦りを見せれば、被災者にも不安や焦りが生まれてしまう。被災者をまとめるということは、同時にボランティアをまとめることでもある。

#### 5 結論 将来への提言

---

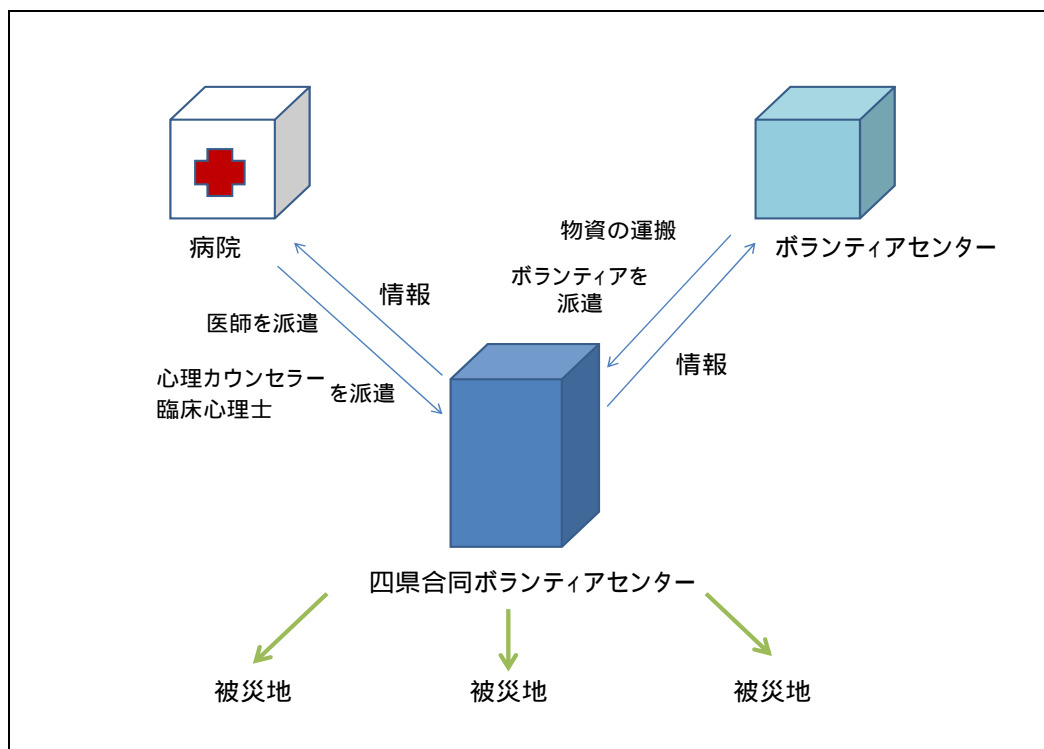
<sup>7)</sup> 特定非営利活動法人 日本ボランティアコーディネーター協会 (JVCA)  
<http://www.jvca2001.org/modules/pico/info/old2index.html>

震災は、自然の脅威を改めて感じる出来事であった。多くの方の命が奪われ、人の無力さに情けなくも感じた。今回の経験を踏まえてこの震災の復興に向けての一助となることを願い提言を試みたい。

東日本大震災では、確かな情報を手に入れるまでに時間がかかってしまった。確かに、今回の震災は予期せぬ事態であり、あらゆる所で混乱や戸惑いが見られた。しかし、あらかじめ、災害時のボランティア体制を築いておくことが出来ていれば、被災者に少しでも早く安心や喜びを届けることが出来たはずである。

そこで、筆者の提言は、4県合同の災害ボランティアセンターの設置である。大規模な被害に見舞われた岩手県・宮城県・福島県・茨城県の4県で一つのボランティアセンターを作る。被災地で発生した問題や被災者のニーズを4県合同ボランティアセンターからネットワークを使い、病院や全国のボランティアセンターに発信する。さらに、その所在をメディアを通して広報する(図表4)。誰もが自分のしたいことと出来る時を登録しておいて必要な時にボランティアとして活動できる。それが本来のボランティアではないだろうか。

図表4 4県合同のボランティアセンターの役割



石川が作成

## 要約

2011年3月11日、東日本大震災が日本を襲い、日本は悲しみに包まれた。そんな中、多くのボランティアが被災地へ足を運んだ。被災地や被災者を想い活動する彼らの行動は、筆者の心を動かした。また、実際に、救援物資のボランティアを経験し、人々の優しさや思いやりを肌で感じる事が出来た。しかし、震災時の活動は予想以上に困難を極め、課題を残したボランティアも存在した。そこで、その問題を解決するための一つの手段として、大規模な被害に見舞われた4県合同のボランティアセンターの設置を提言する。設置をすることで、ネットワークを使い、被災地の現状、被災者のニーズ等の正確な情報を全国に発信することが可能になる。そして、所在をメディアを通して広報し、ボランティア登録をしてもらい、力を貸してもらおう。また、専門分野の人にも力を貸してもらい、被災者を支援する体制を築きあげることで、本来のボランティアの在り方を示すことが期待出来る。東日本大震災の失敗を改善し、経験を将来に生かすためにも、4県合同のボランティアセンターを設置するべきであると筆者は考える。

## キーワード

ボランティア

有償ボランティア

救援物資

時間

継続性

心のケア

心理カウンセラー

臨床心理士

ボランティアコーディネーター

4 県合同のボランティアセンター